

漁業経済

学会短信

No. 15
70.11

「漁業問題研究会」の紹介

発足して一年になろうとしている。

いつの日のことだったか、漁業関係の諸問題を熱心に勉強している全国の若手の研究者をテーブルのうえでさぐってみたことがあった。経済学を志す者、社会学、地理学、教育、資源そして現場の実践の中に身を投じている者、以外に多くの仲間がいることに気付いた。なんとかして影響しあひながら勉強したいものだと思っていた矢先、六九年の暮、ある調査がきっかけで学生・院生そして若い教官が偶然膝を交えることとなった。全ての参加者が若干の漁業研究のための恒常的な意見交流や情報交換を望んでいた。かくして一応暫定的な研究会が発足することになり、漁業問題の研究はいかなるかたちでされねばならないか、一体何をどう追求すれば漁業問題の解明に役立つ

ちうるのかなど若いなりに腹臍なく話しあった。それに従って事務局は会の主旨を整理してみた。(正式名称の発足は七〇年五月である。)

「公害」問題、漁村の変貌、漁業経営の浮沈の激化などひとつひとつの現象をとりあげてみるだけでも、漁業問題の一定の変容がよみとれる最近の事態は、われわれに様々の危機感をさえ抱かせるにたる充分な根拠をもっている。問題の解明にあたつては、未熟者の多い集りだが、日常研究の個別分散から進んだ総合的な視角から問題の本質にとりくむのでなければ、個々人の学問上の悩みの十分な解決の糸口さえ促えられない。研究上の切磋琢磨に一切の温情や感情は許されないことは云うまでもない。全体の中で個人が練磨されると同時に斯界全体のレベルをあげるのとなければ個人の発展もありえないだろう。勿論、それには従来の業績を整理しふまえるという一定の至難の作業も必要であるが、以上は抽象的な次元では常に云われてきたことでもあるが、われわれにとっては新しい課題なので

ある。要するに漁業問題を社会科学としてつらぬくことは容易ならぬことなのだと思う。

次に、若さも手伝って常に直面する問題は、何と云っても漁業問題の本質の解明と研究者としての実践の立場との相互関連である。それは経済学が長いあいだかかえてきた、理論と実践の問題にもつながる。そしてそれはまた、この間の大学紛争のなかで多くの者が経験してきたこと——大学人や研究者に問いかけられたものは一体何であつたのか。いかなる研究をし研究者たればならないのかの問いにも応えること——にも通ずる。現場とわれわれとのあいだにはかなりの距離があり、矛盾もある。どう追いかは終生の問題なのかも知れない。しかし、ひとり良心的な研究者たることも楽でない今日だが、いま研究者の良心などにかかわりなく事態は進行している。いつも議論する機会だけはつくろうと思つてゐる。

現在会員は、教官(4)院生(9)学生(12)。活動は定期的例会を開くこと以外に「強制」しないことにしている。内容は自由。現在活動中のブロックは、東京、近畿、鹿児島

各例会である。事務局を東大農経においている。

斯界の若手研究者の成長のためにも、えんりよのない叱咤、批判を関係諸兄によりしく願う次第です。

尚、学会短信拝借の御便宜をはかっていただいたことを感謝します。

(文責 漁問研事務局)

鹿児島での漁業経済

研究会の状況

堀口 健治

鹿児島においては、鹿児島大学を中心にして漁業経済研究会を最近開始した。

我々の考えでは、漁業経済を研究するポストが比較的多い鹿児島大・水産学部において数の多数が研究成果の集積へと連結することが期待されるし、又、実現もされなければと思っている。

そのため従来の個々人の蓄積をまずは発表し討論し、そのうちに一定の目的・方法論で共同研究に、歩を進めたいと思っている。

行なっている漁業経済研究会「教室研究

会」の今迄実施したものをあきらかにすると、

第一回 岩切成郎氏「漁場経済よりみた漁材構造の変化過程」(四四年十月)

第二回 堀口健治氏「資本の参入障壁としての許可制度と超過利潤」(四四年十一月)

第三回 市川英雄氏「カツオ節の流通問題」(四四年十二月)

第四回 中井 昭氏「香川県海外出漁史概説」(四五年一月)

第五回 鯨岡稔男氏「鹿児島県海外出漁史」特に韓海通漁を中心として(二月)

第六回 原多計志氏「鹿児島県カツオ漁業史」(三月)

第七回 原多計志氏「飯島調査報告」(四月)

第八回 中橋 興氏「最近の水産物流通の諸問題について」(七月)

第九回 大津昭一郎氏「熊野灘の漁村の社会構造」(七月)

毎月一回を定例としているが、見られるように鹿児島以外の方々にも御発表を戴いている。

これは鹿児島大(集中講義に采られた際

にお願いしているわけであるが、今後この方式を採用し、鹿児島に調査、来遊の場合には、一日ひきとめて諸研究者の蓄積をはき出してもらうことにしたいと考えている。鹿児島に来られる方は今後その点の覚悟が必要だと思われるのである。念のため、これからは在野の研究者ならびに大学院の若手研究者にも討論参加だけでなく、研究発表をになつてもらい、相互交流の場として定着化したい。

それらの実績の上で、今迄行なわれていたカツオ漁業の共同研究から更に各種の共同研究に発展させ、他方で我々独自の研究誌も発行したいと予定している。

(鹿児島大学水産学部)

第十八回大会についてお願い

第十八回大会は四十六年五月中旬熱海最高裁の宿舎で開催の予定ですので、

(1) 個別報告の申込

(2) 大会シンポジウムのテーマ

を事務局に四十六年一月末日までお寄せ下さい。また大会のもちかたについての意見もお寄せ下さることを事務局としては強く希望しております。(学会事務局)

「水産研究会」の発足

去る七月一八日、水産関係労組、全漁連労組、全農村水産関係分会等の組合員（多くは執行委員）および研究者・ジャーナリスト等を会員とする「水産研究会」の発足をみました。

現在の水産業が当面している危機的な状況を、それぞれの分野から究明し、水産業の発展の方途をさぐり、失われている展望を確立しようというのがこの会の趣旨となっています。

会員数は現在六〇数名で、さしあたりは月例研究会、会誌発行が主な事業とされています。

月例会は、発会記念講演としての高橋富士夫氏の「地域開発と沿岸漁業の動向―主として首都圏における実態について―」を皮切りとして、九月二六日には、渡瀬節雄氏（大水）の報告「海洋開発と水産業」がおこなわれました。

この問題については、さらに改めて小グループによる討論会もたれ論議がたたかわされました。

そして、第三回として、木村栄吉氏（明治大学）「漁業独占資本の経営分析―大洋漁業の経営分析を中心に―」が予定（一〇月三一日於水産庁会議室）されています。会の事業としては、このほか問題別の研究グループによる共同研究の推進といった計画もありますが、まだ実現をみていません。

会誌は創刊号が九月一日に発行され、これには発会総会の講演その他が掲載されています。

発足総会で会長に岡本清造氏、副会長に宮城雄太郎氏が選出されました。

事務局は、東京都千代田区丸の内二―一二内外ビル六一〇号室大洋労組内にあります。

（大海原 宏）

学会誌原稿申込

学会事務局

漁業経済研究第十九巻一号・二号の発行計画は次の通りです。会員各位の研究成果をふるってお寄せ下さい。

原稿べ切 第一号

昭和四十六年五月末

第二号

昭和四十六年九月末

編集上の都合もございますので投稿予定を第一号は二月末、第二号は五月末までに事務局にお知らせ下さい。

原稿枚数（四〇〇字詰）

論文 四〇枚

資料 三〇枚

書評 一五枚

学会展望・研究動向 一五枚

勤務先・住所変更

秋谷重男	
池田郁夫	速洋水産研究所
井上和夫	水産庁 研究一課
井村幸二	水産庁 海洋二課
恩田幸雄	長崎県庁水産部
岡本信男	
黒萩康隆	全日海釧路支部
加瀬林成夫	茨城県内水面水産試験場
小沼勇	農林省東海農政局
三幣清一郎	東海区水産研究所
塩見潔	
田中 弑	大分県漁船保険組合
内藤一郎	南西海区水産研究所
橋本隆	岩手県庁経済部
古川厚	日本海区水産研究所
山本伸治	農林漁業金融公庫仙台支店
飛田勇次	水産庁速洋水産研究所
下城宏之	水産庁 研究一課
鶴田正裕	

新入会員

川口恭一	水産庁企画課
中村一郎	大日本水産会国際部
小黒哲郎	朝陽中学校

名簿追加

石川賢宏	水産庁企画課
和歌山県信漁連	

訂正

池野茂	関西学院大学・高等部
-----	------------

退会

馬場俊胤	45年4月
増田哲夫	45年5月
浅井繁春	45年3月
工藤重男	死亡